

【第 2 回】 11 / 9 (土)

「夫婦別姓？夫婦同姓？～諸外国の事情～」

講師：笹川あゆみさん  
(東京家政大学人間文化研究所非常勤講師)

諸外国では、「夫婦同姓」「夫婦別姓」「複合姓」を自由に選択できる『選択制』が多い状況です。もともと「夫婦同姓」であったドイツ・トルコ・タイでも、法改正が行われ『選択制』になりました。逆に、「夫婦別姓」であるのは、中国・韓国・ベルギー・イタリアなどです。実は日本でも、国際結婚の場合は、原則的には「夫婦別姓」となります。また、文化によっては、姓そのものがなく、先祖からの伝承を別の形で表すという国もあります。

姓に対する考え方は変化してきています。今は「名前や姓はアイデンティティーの一部であり、夫と妻に平等に保障されるべき権利である」という考え方が国際社会では一般的となっています。

夫婦別姓



【第 3 回】 11 / 23 (土)

「メディアの中の女性と家族」

講師：平田由紀江さん (獨協大学国際教養学部准教授)

「純粋、受け身、ある時は開放的」などの日本女性に対するイメージは、「蝶々夫人」の影響もあり、現実の日本人女性と関わりなく形作られてきました。韓国も例外ではなく、メディアで扱われる日本人女性は、奔放な性格の反面、夫には尽くすという二面性を持って取り上げられることが多くなっています。

また、日本国内で作成されるさまざまなジャンルの性的ビデオの影響もあり、日本人は男女ともセックス好きで変態であると思込んでいる韓国人もいます。

「性に開放的で都合のいい女」というイメージは、現在でも海外のメディアで繰り返し強調され、日本人女性への誤解・偏見を生み出していることに注意すべきです。

韓国事情



【第 5 回】 12 / 7 (土)

「現代ドイツとジェンダー  
～ライフスタイルの変化から考える～」

講師：田中洋美さん  
(明治大学情報コミュニケーション学部特任講師)

ドイツではメルケル首相をはじめ女性の社会進出が進み、男女に関わりなく、多様で柔軟な働き方が認められています。出産・育児を機に退職する女性は少なく、男性の育児・家事時間も日本の3倍以上です。「女、男」という性別役割分担に反対する男性も73%に上っています。

ジェンダーの視点には、性別役割分担の他、同性愛者、移民女性の3つの柱があります。ドイツでは、同性愛者や移民女性らが公の場で活発に活動しています。日本と比べてドイツで男女平等が進んでいる理由は、1960年代後半からの生活スタイルの変化、特に事実婚の拡大が契機となり、その後、女性の権利拡大の取り組みを地道に重ねてきた結果だと考えています。



ジェンダー

【第 6 回】 12 / 14 (土)

「日本で暮らす外国人女性たち」

講師：長谷部美佳さん  
(東京外国語大学世界言語社会教育センター特任講師)

日本に在住する外国人のうち、女性は半数を超えています。国別では上位4カ国(中国、韓国・朝鮮籍、フィリピン、ブラジル)の中で、男性の方が多いのはブラジルだけ。年齢別では、20歳代の女性が特に多くなっています。

移民の女性化は、日本だけでなく世界的な流れで、「女性らしい仕事」と考えられている家事労働者、介護士・看護師、性風俗産業に対する需要の増加や家族としての移動の増加が、その主な要因となっています。

介護などのケア労働は、労働の場所とサービスを受ける場所が同じでなければならないため、低賃金の労働力を海外から移動して従事させる必要があります。また日本では、「家族内」のケア労働確保のための結婚も、外国人女性増加の大きな要因となっています。



外国人女性

一企画一 インタビューコーナー

第4回 農事組合法人 国府野菜本舗代表理事  
眞塩光枝さんに聞く

インタビューコーナーでは、「男女共同参画社会の実現を目指し、さまざまな立場で活躍している人」をシリーズで紹介しています。今回は、地元の女性たちと起業をはたした眞塩光枝さんに、女性が働き続けることについてお話を伺いました。

『国府野菜本舗』の事業内容について  
地場野菜の生産直売と、漬物や惣菜などの加工販売を行っています。この地域には先人が残してくれた「国府白菜」という素晴らしい野菜がありますが、どんなに美味しい野菜でもうま味調味液で同じ味の漬物になってしまうという危機感がありました。それならば昔ながらの美味しい白菜漬物を自分たちで作ってしまおうと、平成12年に地元の女性たちで立ち上げた「加工研究会」がベースになっています。



ちもそういうことをやりたかった」と応援してくれた先輩女性もいました。出資のほか、賛助会員の制度も設け、250人の方に会員になってもらいました。また、最近は生産にも力を入れようと、地元の男性に手伝ってもらうようにもなりました。地域との関わりを大切に、地域に支えられる企業になりたいと思っています。

起業して10年が経ちました  
振り返ってみると、家庭内で、特に夫に認めてもらうまでが大変でした。初めの頃は、家庭が主で合間に仕事という感じでしたが、続けるうちに徐々に家族が理解してくれるようになり、今では仕事の方がウエイトが高くなっています。10年続けると周りの反応も随分変わりますし、それが「お互いの生き方を認める」ということなのだろうと思います。うちのメンバーは皆同じ感じ方をしていると思いますね。若いメンバーには、調理師や野菜ソムリエなどの資格を取ることを勧めてい

起業の仲間について  
自分たちの求めている味を出すための勉強を重ねた後、平成15年に今の店舗をオープンさせました。資金は、県からの補助金のほか、80人の女性からの出資金です。「私



ます。若いうちからモチベーションを持って仕事を続けていくことの大切さを自覚して欲しいと思っているからです。そうやって徐々にキャリア形成をしていってもらえればと思っています。

地場野菜の直売、お弁当・惣菜・ピクルスなどおふくろの味が好評です！



高崎市引間町にある「国府野菜本舗」

協働事業報告

12/15 (日)

『乳幼児の救急』～小児科医師が語る、乳幼児の救急対処法～を開催

講師：山田佳之さん (県立小児医療センター医師)



(ぐんま男女共同参画センター共催)で、県庁会議室を会場に開催しまし

た。参加者：大人74人、子ども25人(うち保育18人) 山田さんは、乳幼児の救急時の発熱や下痢などの症状別対処法や医療機関への受診判断のポイントを分かりやすくお話しされ、県HPでの感染症情報のチェックや手洗いやマスクなどの予防策の大切さも強調されました。講義室は熱心な両親等、保

育室は元気な子ども達で熱気に包まれていました。



(群馬県地域密着型子どもの救急啓発事業)